

日経MJ 2017年 5月22日付

ビッグデータの競争優位

ビッグデータ、あらゆるモノがネットにつながるIoT、AI（人工知能）、クラウドコンピューティングなど、情報関連のキーワードが世の中に氾濫している。これらの技術によって社会が大きく変わることが実感できるからだ。そうした中でGAF Aと呼ばれる企業が圧倒的に他社をリードしている。グーグル、アマゾン、フェイスブック、アップルの頭文字をとってGAF Aとなる。

これらの企業の競争優位は、膨大なデータの蓄積にある。インターネットを通じて利用者は、膨大な情報



伊藤元重の

エコノウオッチ

これらの企業に吸い取られる。膨大な情報、すなわちビッグデータを分析することで様々な経済的な価値が生まれるのだ。AIはそうした情報を分析する上で威力を発揮するだけではない。そもそもAIの機械ラーニングは多くのデータを集めるほど能力が高まる。中国のアリババや Tencentなどの企業も、中国という守られた市場の中でビジネス規模を急速に拡大させている。中国の膨大な人口が、閉鎖市場であっても、ビジネス拡大に必要な市場規模を提供している。昨年11月11日の中国のシングル

リアル経済データに活路

（独身）の日のアリババの売り上げが1日で1兆8千億円にもなったことから、その市場規模のパワーが分かるというものだ。世界中にネットワークを

広げ、規模のパワーをますます強めていく米国のGAF A、中国という閉鎖された巨大市場の中で拡大を続ける中国勢、その成長のパターンこそ違うものの、世界のデータはこうした二つのタイプの企業に独占される方向に動いているように見える。こうした中で日本はどう動いたらよいか。ある経営者が、「日本企業はGAF Aの情報奴隷あるいは下請けになってしまうのではないか」と発言していた。そうした危惧は根拠

のないことではない。データや情報を握る企業がビジネスで有利なポジションに立つことができるからだ。こうした環境の中で日本の情報戦略の方向を考える上で鍵となるのが、比較優位という考え方だろう。ずっと先を走っているGAF Aを必死にならなくて追いかけても、もう間に合わないかもしれない。それよりもGAF Aの提供する環境は最大限に活用しつつ、日本の強みを追求することに集中した方がよい。情報化社会ではデータの活用が鍵となる。ネット検索やインターネットビジネスで蓄積されるデータをバーチャルデータという。GAF Aが得意

しかし、これとは別にリアルデータというものがある。工場での機械の稼働、医療現場でのレセプトやカルテの情報、あるいは店舗での購買データなどだ。こうしたリアルな経済活動に付随して蓄積されるデータを活用するメリットは大きい。センサーを活用したIoTは、リアルデータを集めて、それを分析し、そして活用する上で有効な手法である。リアルデータの活用をどう加速化していくのか、日本の成長戦略を考える上で鍵となるはずだ。（学習院大学国際社会科学部教授）

◆ 今回から隔週月曜日に掲載します。